

中山間地域の本質的課題

研究員 草刈 いづみ

1. 研究の背景

中山間地域の事業や施策、補助金などは多く存在するが、助成期間が過ぎればせっかく取組みの始まった事業や掘り起こされた人材などは自然消滅してしまう傾向にある。また、そもそも「中山間地域」とはどのような地域を指し、どのような定義づけのもとに各種支援が行われているのか、その目的と成果を問う上でしっかりと認識しておくことが必要である。

さらに、一般的な市民レベルの理解と国レベルの（または都市における）認識の差異、鳥取県の現状と県の施策の方向性や動向について整理しておくことも、そのほとんどが中山間地域に該当するといわれる鳥取県において地域支援に携わるためには欠かせない、基本的な研究課題である。

上記のような理由から、22年度は特に中山間地域の定義や県の方針、自治体の取組みや地域の実情を把握するため、実際にいくつかの地域に出向いて現況調査を行うこととした。

2. 研究内容

2. 1 過疎に悩む中山間地域での調査（農林業の後継者問題と現状）

中山間地域が担う役割のひとつとして言及されるもののうち、農林業の適切な営みは農地や山林の保全に貢献し、ひいては都市部の豊かな生活を支える自然環境形成に大きく寄与しているというものがある。

しかし、実際は後継者の問題や農林業が事業として採算に合わないことから耕作放棄地の課題が深刻になっているのが現状である。

調査では、後継者がおらず、かつて苦労して整備した水田が荒れ果て、手入れされないために木々が倒壊しているなどの実態を鳥取市用瀬町赤波と智頭町にまたがる地域で現地調査を行った。

2. 2 就農支援

農業の後継者問題や過疎に対応するため、自治体では就農支援を行っているところもある。関西方面等で就農支援相談会を開催し、移住・就農希望者に一定資金を貸与したり補助するなどして鳥取県で就農してもらおうというもので



写真1. 倒壊する木々



写真2. かや等が生い茂っている

ある。

新規就農者への技術習得支援施設として「とっとりふるさと就農舎」を設置し、毎年研修生を送り出している鳥取市において、この制度を利用後実際に就農し、水稲の苗栽培や梨、白ネギ等に携わっている卒業生2名に聞き取り調査を行った。

表 1. 聞き取り調査先

調査先機関等	住 所	連 絡 先
いきいき成器保育園	鳥取市国府町中河原33	0857-58-0161
JAとっとりいなば湖東支店	鳥取市湖山町東5丁目228	0857-38-8808
鳥取大学フィールドサイエンスセンター	鳥取市湖山町南4丁目101	0857-31-5600
鳥取県農業試験場（園芸）	倉吉市大谷茶屋883-85	0858-23-1341
とっとりふるさと就農舎（聞き取りは卒業生）	鳥取市国府町麻生3-3	0857-22-7225

2. 3 大学及び研究機関の取組

直接的な中山間支援とはいえないかもしれないが、県内外の最先端の事情や動向に通じ、指導的な立場にもある県内の研究機関、鳥取大学や鳥取県園芸試験場ではどのような支援が模索されているのだろうか。

鳥取大学農学部フィールドサイエンスセンターで、中山間地域における農産物直売所のあり方について聞き取り調査を行った。また鳥取県園芸試験場(北栄町由良宿)を訪問し、県内の地域ごとの農業の特性や新品種の開発について聞き取り調査を行った。

2. 4 J A鳥取いなば農業協同組合

中山間地域の課題の一つは農業にある。この農業について、農協の存在を無視しては語れない。販売や流通の自由化が促進され、ホームセンターの普及による肥料や資材の個別入手が可能となった現在でも、栽培技術の指導や作付管理、相談に応じたり、補助制度や資金貸付など多方面で農家を支えている。J A鳥取いなば、営農指導センターを訪ね、近年の農業の特性や農家の抱える課題、稲作に対する規制や補補助制度等につき聞き取り調査を行った。

3. 効果・評価

3. 1 過疎に悩む中山間地域での調査（農林業の後継者問題と現状）

過疎や高齢化が進むに任せて公的施設や公共サービスが撤退すれば、ますます新規の移住は望めない。また現状に拍車がかかり、残されていくのは高齢者である。このような状況になった時、いったいどこまで自助努力に負わねばならないのだろうか。本調査では過疎に悩みながらも地域としての存続を図る取組みの一例として、地区公民館の活動や保育園の自主運営という事例（鳥取市国府町成器地区）を調査することができたが、想定されたように、資金面や園児の募集について苦勞が多いこと、補助金申請や支援制度の活用について情報や知識が乏しく、

対応できる人材が不足しているなどの課題があった。また運営の点では、保育士や給食、地域活動、ふれあい教育などに携わる支援者のほとんどが自主運営の意向に賛同し、半ばボランティア的な条件で協働している。しかし、「自助努力」という選択は心身共に支援者の負担が大きく、この形態では継続性について危惧せざるを得ない。

兼業農家が増え、最低限の手入れしか行われていない山林や農地も増加している。生産性が失われ、不法投棄や雑草が生い茂る荒れ地となるなど回復が難しい状況に陥っている土地もある。このような状況はなにも山間地域だけではなく、調査では市街部の平地でも耕作放棄地や荒れ地、作付の行われていない水田が急速に増加していることをJAの職員と共に見回り、確認した。

後継者育成についても喫緊の課題ではあるが、土地の貸し借りによる作付、本来の農地・山林としての機能を保つ仕組みが早急に必要である。

3. 2 就農支援

実際に就農している2名のうち、1名は、水稻の苗を栽培して出荷するグループに加わることであり、このため、経営的に収支が安定している。またもう1名は、梨が好きで、ずっと梨を栽培したかったという思いから就農を志したが、梨栽培のみでは経営が成り立たないことを学び、水稻や白ネギなども組み合わせて栽培することで農業を継続させている。2人は共通して、農業の魅力は、美味しいものを食べられ、自分で時間調整しながら仕事ができることだと語った。しかし、調査の結果、就農支援には経済的な支援に偏っても、技術の伝達に偏っても不十分であるということが明らかとなった。また、農業に理想や夢を思い描いている人も失敗しやすいという。実際の農業経営は非常に厳しく、採算が合うかどうかは数年では分からない。たまたまうまくいくこともあるが、それが持続するとは限らない。多品目を組み合わせることも重要であるし、地域の農業者との付き合い、気候や風土に関する助言、出荷時期の調整などを考慮しなければならないことは多分にあり、趣味的な移住では失敗に終わる。

本調査で、「とっとりふるさと就農舎」が非常にうまく機能していると評価された点は、①技術をバランスよく指導する（品目に偏りなく）、②卒業後の就農について、サポートがある（農地や居住場所の確保を含め）、③研修生の趣向にのみ合わせた指導を行わず、実践的で、地域の農業者に師事する機会を与えるなどの工夫を行っている、④経営や肥料、農機具・農薬の知識、収支のバランス、出荷時期の調整、価格設定等についても学べる、⑤経済的支援（宿泊施設・助成金等）があるなどの点であった。

過疎地域における地域生活の基盤、農林業などの産業振興対策としては、ボランティアや一時的な助成制度ではなく、取組みが事業・産業として成立するシステムを構築しなければ持続的かつ人の集まる地域支援とならない。

3. 3 大学及び研究機関の取組

鳥取大学フィールドサイエンスセンターでは、農産物の直売所のあり方についてお話を伺った。余剰野菜や手段がないために出荷されないで廃棄されてしまう作物を集荷して朝市などで販売する移動販売システム等は、中山間地域の農家や高齢者の副収入になるとする見方もある。けれども現実には、直売所運営ではグループを作り、うまく機能してはじめて継続した運営が可能となる。集荷システムについては、安易に軽トラで集荷し販売すればよいという考えでは、

実現は難しい。その理由には、鮮度や見栄えを保つため、物によっては冷蔵庫（保冷車）を必要とする等の実態がある。また消費者が品物の鮮度や見た目を瞬時に見分けるため、価格設定や商品の程度についても基準が必要である。集荷時に価格設定をするのか否かで、集荷者に求められる能力も異なってくる。いずれにしても、行政や地域の思いつきだけでは継続的に採算をあげていくことは難しい。

園芸試験場では、農業も県内各地域で特色や地域特性があることを知ることができた。地形的にも平野部なのか砂地なのか、山間地域なのかで栽培品目が異なる。中部では建設事業者が業務閑散期に農業と連携する取組みがある。また畜産分野では後継者が減少していく中、大規模化や設備・資金投資で改善を図っているところもある。農業者が栽培から出荷、営業、販売などのすべてをこなし、農業を生業として収益を得られるようなシステムづくり、高付加価値な生産物への品種改良や加工技術の開発など（黒ラッキョウ）と、それらを実践するための支援等が農業育成に重要である。

どの課題についても、地域ごとの特色を活かす一方で、先駆的な取組みにも積極的に関わるには基盤となる力が必要であるが、地域の基礎的な力が衰えているのが中山間地域である。それが人材なのか、補助・支援制度なのか、移住や定住の問題なのか、地域の課題を事業や産業として成立するように捉え直すことなのか、県下で最も重要視されることは何なのか、今後の課題とし、調査を継続したい。